

松戸市教育委員会会議録

令和元年6月定例会

松戸市教育委員会会議録

令和元年6月定例会

開 会	令和元年6月6日(木)午後1時30分より	閉 会	令和元年6月6日(木)14時40分	
署名委員	教育長 伊藤 純一	委 員	伊藤 誠	
出席委員 氏 名	教育長 伊藤 純一	○	委 員 伊藤 誠	○
	教育長職務代理者 山田 達郎	○	委 員 武田 司	○
	委 員 市場 卓	○	委 員 山形 照恵	○
出席職員	内訳別紙のとおり			

提出議案	内訳別紙のとおり
特記事項	

教育委員会事務局出席職員一覧表

令和元年6月定例教育委員会

No.	部課名 及び 職制名	氏 名	No.	部課名 及び職制名	氏 名
1	生涯学習部 部長	片田 雅文	21		
2	生涯学習部 審議監	津川 正治	22		
3	学校教育部 部長	小澤 英明	23		
4	学校教育部 審議監	岡村 隆秀	24		
5	教育企画課 課長	菊地 治秀	25		
6	” 参事	平松 澄明	26		
7	” 専門監	村上 陽子	27		
8	” 課長補佐	大西 真	28		
9	” 主査	永淵 智幸	29		
10	” 主任主事	島村 仁美	30		
11	” 主事	宮本 愛菜	31		
12	生涯学習推進課 課長	橋本 貢一	32		
13	” 課長補佐	中山 和子	33		
14	学務課 課長	西郡 泰樹	34		
15	” 課長補佐	加藤 尚美	35		
16	” 主幹	横山 忍	36		
17			37		
18			38		
19			39		
20			40		

令和元年6月定例教育委員会会議次第

1 日 時 令和元年6月6日(木) 午後1時30分より

2 場 所 教育委員会5階会議室

3 議 題

(1) 議 案

4 その他

令和元年6月定例教育委員会会議 議題目次

(1) 議案

① 議案第11号

松戸市公民館運営審議会委員の委嘱について (生涯学習推進課)

② 議案第12号

松戸市学区審議会委員の委嘱について (学務課)

教育長 それでは、傍聴についてご報告いたします。

本日の教育委員会会議に3名の方から傍聴したい旨の申し出があります。松戸市教育委員会傍聴人規則に基づき、これをお認めいたしますので、ご了承願います。

なお、これ以降傍聴の申し出がある場合は、事務局への受け付けをもって許可にかえることといたします。

それでは、傍聴人を入場させてください。

(傍聴人入室)

◎開 会

教育長 ただいまから令和元年6月定例教育委員会会議を開催いたします。

◎会議録署名委員の指名

教育長 開会に当たり、本日の会議録署名人を伊藤委員にお願いします。

◎議案の提出

教育長 それでは、日程に従い議事を進めます。

本日の議題は、議案2件となっております。

では、ここからの議事進行は山田教育長職務代理者をお願いします。

◎議案第11号

教育長職務代理者 それでは、日程に従いまして、議事を進めさせていただきます。

初めに、議案第11号 「松戸市公民館運営審議会委員の委嘱について」を議題といたします。

では、ご説明をお願いします。

生涯学習推進課長。

生涯学習推進課長 生涯学習推進課長の橋本でございます。よろしくお願いいたします。

資料1ページをごらんください。

議案11号 「松戸市公民館運営審議会委員の委嘱について」 ご説明申し上げます。

社会教育法30条及び松戸市公民館の設置及び管理に関する条例第4条の規定に基づき、別紙の者を松戸市公民館運営審議会の委員に委嘱するものでございます。

提案理由でございますが、松戸市公民館運営審議会委員のうち、学校教育関係者につきましては、松戸市校長会からの推薦により委嘱をさせていただいておりますが、松戸市校長会において、松戸市公民館運営審議会委員の変更が決定されたため、新たに委嘱するものでございます。

資料2ページには、松戸市公民館運営審議会委員の名簿が添付してございます。

なお、新しく委嘱する委員の任期につきましては、令和元年6月6日から令和2年6月2日まででございます。

よろしく願いいたします。

教育長職務代理者 議案第11号につきましては、ただいまのご説明のとおりでございます。

これより質疑及び討論に入ります。

先月ですか、スカウト連絡協議会の会長さんの件で出たばかりでございますので、今度は学校教育関係者というところです。

ご質問等いかがでしょうか。

よろしいでしょうか。

これも、人事異動に伴うものであります。活動自体等についても、先月ご質問もあったかと思っておりますので、ないようであれば、いいですかね。

では、ないようでございますので、これをもちまして、質疑及び討論は終結といたします。

これより議案第11号を採決いたします。

議案第11号について、原案どおり決定することをご異議ございませんでしょうか。

(「異議なし」の声あり)

教育長職務代理者 ご異議がないものと認め、議案第11号は原案どおり決定いたしました。

◎議案第12号

教育長職務代理者 次に、議案第12号 「松戸市学区審議会委員の委嘱について」を議題といたします。

学務課長、お願いします。

学務課長 学務課長の西郡でございます。よろしくお願いいたします。

議案第12号 「松戸市学区審議会委員の委嘱について」 ご説明申し上げます。

松戸市学区審議会委員の任期が、令和元年7月1日をもって満了いたします。松戸市学区審議会条例第2条の規定により、4ページでございますように、13名を学区審議会委員として委嘱することを提案いたします。

任期につきましては、令和元年7月2日から、令和3年7月1日までとなります。

なお、1号委員、知識経験者は、松戸市学区審議会運営規則第2条により、市内高等学校の代表、副市長、総務部長、そのほかで構成されております。通常、1号委員は4名ですが、平成31年3月末に前副市長が退職され、現在その職を任命されている者が不在のため、欠員となっております。

よって、委員の数は昨年度より1名減の13名となっております。

以上でございます。ご審議のほどよろしくお願いいたします。

教育長職務代理者 ありがとうございます。

議案第12号につきましては、ただいまのご説明のとおりです。

これより質疑及び討論に入ります。

これ、7月からの任期で、2年間ですね。令和3年まで。それぞれ再任をされるという提案でございますが。

市場委員。

市場委員 今のご説明の中で、副市長さんがおやめになられたので、その分減っているという話がありました。副市長さんという立場の方が、今はいらっしゃらないという意味ですか。どうでしたっけ。欠員なんですか。

すみません、ありがとうございます。

じゃ、また新しく副市長さん、どなたか就任されれば、入ってくる可能性が高いということですか。

学務課長 新副市長が就任されましたら、教育委員会会議の承認いただきまして、学区審議会委員として委嘱したいと思います。

市場委員 ありがとうございます。

教育長職務代理者 条例上は、第2条で審議会は非常勤の委員20人以内、20人以内ですから、人数的にはもっと枠はあるということですが、そのうちから1、知識経験を有する

者、2、学校長の代表、3、PTAの代表、4、住民の代表ということでありまして、それぞれの号数の委員ということで、1号委員、知識経験を有するということで、慣例的には副市長さんが入っていらっしゃるというところがありますという説明がありました。これ、最低人数は決まっていませんから、20人であろうと13人であろうと、これは組織上問題ないということかと思いますが。

よろしいですか。

ちなみに、これ、8期目になられると、9期目になられる、8期目になられる、9期目は町会・自治会連合会長さんということで、そのお役目からということだと思いますが、8期目のこの佐藤さんですか、家庭裁判所参与員の方、この方は大分期を重ねていらっしゃいますけれども、何か別に変える必要があるという意見ではないんですが、どういった検討があったのかどうか、その辺もしわかれば、コメントいただけるとありがたいです。

学務課長、お願いします。

学務課長 ご指摘のとおりです。委員の中には、長年継続している委員もおるところでございますが、本来であれば、審議会の硬直化等を防ぐという意味で、在職年数が長い場合、再任は行わない方向なんでございますけれども、1号議員のほうをごらんいただきますと、4名のうち1名が欠員であります、先ほどの副市長でございます。それから、在任期間が短い委員があと2名ということになりますので、1名につきましては、経験豊富な佐藤委員の再任を考えておるところでございます。

以上でございます。

教育長職務代理者 ありがとうございます。

この学区というものに対する理解とか、過去の経緯等についての知識ということをお補っていただくために、続けてお願いしているというご説明だったかと思います。

よろしいですか。ありますか。

山形委員。

山形委員 山形です。

1号委員のところは、ほかの審議会等の委員という形でいうと、知識経験というところですが、知識というところでいうと、大学の先生などが多かったんですが、知識経験を有するところ、見間違いかもしれないですが、どんな見識で選ばれているのか、基準的なものがあるのかなというところを伺ってみたかったです。家庭裁判所の参与官という方は、勉強不足で認識が甘いからわからないというところがあるかもしれないんですが、どん

な部分で学区を審議する際、この方たちがどのようなアドバイスをしてくださるという意図
というか、目的というところを教えていただければありがたいです。

学務課長 やはり学区でございますので、その地域のことによく精通されている方が、任命されることがふさわしいのではないかとというようなことを考えております。知識がある方ももちろん結構なんでございますけれども、やはり市のことについて詳しい方ということで、これまで副市長に入っていたいただいている経緯がありますので、この後もそういう形で臨めればと思っております。

以上です。

山形委員 ありがとうございます。

教育長職務代理者 いいですか。

家庭裁判所というところの……。

山形委員 家庭裁判所というのが……。

教育長職務代理者 任が質問の主だったように思いますが。恐らく児童問題、家庭問題といったところなんでしょうか、この家庭裁判所の参与という方をお願いする背景といったものが、学務課長、お願いします。

学務課長 すみません、任期が長い方でございますので、最初の状況については、私、申しわけない、存じ上げてはおりませんが、やはりその家庭裁判所ということでございますので、今、山田委員からございましたように、子供たちのことだとか、地域のこと精通されている、その長い経験を有されているということで、これまで続けてこられたというふう考えております。

以上です。

山形委員 ありがとうございます。

その地域の理解とか児童の背景だとかを考えると、もしかすると、ここに民生委員の方だとか、児童相談員の主任の方だとかも入ったりすると、背景理解なんかも深まるのかと考えました。家庭裁判所の方がなぜここにいるのか、多分長く経験されていたりとか、家裁で起きていることというのは大変なことが起きているので、そのことに関して見識を持って、地区の配慮もされているというところもあるということですね。今現状としての本当の現場のこの10年、この何年かで、もう一、二年でも変わってきているので、その辺なんかもリアルな声の部分は、住民の代表の方がきっとお話を、地区をされている方がしているとは思いました。人数が多いからいいとか悪いとかそういうのではないんではあるんですけども、今、

副市長の方が再任されて14名になるのだと思ったりとか、その家庭裁判所というところがそういうところで選ばれているということがわかりました。

ありがとうございます。

教育長職務代理者 ご意見ということで、幅広くいろんな方から、学区を決める審議会ですの
で、その辺のところが必要とされる見識はほかにもあることについても、アンテナ広げてほ
しいというご意見だったと思いますので、お願いします。

いいですか。

武田委員。

武田委員 今、山形委員がおっしゃったのと同じような形なんですけれども、意見として思っ
たのは、先だって、特支の学区編成をしていますよね。なので、やっぱりそちらの関係にお
詳しい方とかを、自治会長がだつと並んでいるので、定数にまだ余裕があるみたいなので、
入れたほうがいいんじゃないかなと思います。これからはどんどん特支の児童生徒が増えて
いくと予想されている時代なので、特支の方たちの背景とかいろんなものがわかっていらっ
しゃる方のご意見というのも、そろそろ入れてもいいのなかというふうに想像しました。あ
くまでも意見です。

教育長職務代理者 ありがとうございます。

そのほか、よろしいでしょうか。

それでは、ないようでございますので、これをもちまして、質疑及び討論を終結いたしま
す。

これより議案第12号を採決いたします。

議案第12号について、原案どおり決定することにご異議ございませんでしょうか。

(「異議なし」の声あり)

教育長職務代理者 ご異議がないものと認め、議案第12号は原案どおり決定いたしました。

本日予定していた議題は以上です。

◎その他

教育長職務代理者 それでは、その他に移ります。

事務局より、まずありますか。

いいですか。

それでは、委員の皆さんということで、私のほうで、ちょっと研修会報告を出しておりました、紙で出していない方も、また別の機会でもいいですが、ここで補足をしていただければということもございますので。

それでは、この間、各教育委員会の連合会とか連絡協議会とかについての総会の時期で、あわせて研修会等も行われたということがありますので、まず、東葛飾地区について、山形委員、お願いできますか。

教育長職務代理者 2枚もの4ページのものですね。

山形委員 配布資料の一番最後に言いたいことはまとめてあるんですが、この文字のフォントが、ユニバーサルデザイン教科書文字というのを使っています。あまり見慣れたことのないような文字を使っています。ディスレクシアのお子様など、はねなどで間違えたり、文字がくっついてしまって、見えなくなるとか、混乱を起こすことがあります。これは、普通のマイクロソフトのワードのフォントを選ぶところでも選べますので、何かスライドとかをつくる時も、ユニバーサルデザインのフォントがお薦めされています。この情報もお伝えしたくて、このフォント使わせていただきました。

本題に入りますね。

5月14日の研修会で、上條理恵先生のお話を聞かせていただきました。「子どもの心のシグナルをどう捉えるか？大人たちの連携と役割について」ということで、7つのキーワードをいただいて、お話をさせていただきました。

印象的だったのが、1枚目の真ん中にあるSNSなしでは語れないというところで、柏市のほうで小学生1,200人からデータをとったら、知らない人と会ったことがあるという子が6%いた。6%というと、柏市の児童で換算すると70名ということに、この1,200人の中でいうと70名が、知らない人がネットとつながって、親も知らない背景のもと会っている。中学生になると10%弱いるというところで、SNS、スマートフォンを持たせた親の責任がとても大きいものでもありますので、その辺も、自分自身も改めて襟を正さなくてはならないなと思いました。ほかにも初めて聞くようなお話もさせていただきました。

2枚目の真ん中から下、被虐児児童について、虐待を受けた子が、何らかの非行に走っているという背景を、私たちはしっかりと把握していかなきゃいけないんだなと思いました。急に何か非行とか問題行動になるのではなくて、心の傷つきがあるから、そういうような行動に移ってしまうというところなんです。

最後にまとめのほうで、このお話を聞かせていただいて、親へのサポートについてという

ことで質問させていただきました。質問の答えの中で、困り感の共有や定期的な面接、親も子ども一緒に定期的な面接をすることや、気にしたことはなかった、女性と男性が1対1で場所で面接する際には密室を避けるなど、具体的な警察での少年へのかかわりなども含め、具体的なアドバイスが印象的でした。

感想と今後についてで、子供にかかわる大人の心の安定の大切さや、その非行している子が急に非行したんではなくて心に傷があるということを持つと、偏見がなくなるなどと思います。子供、日ごろから私自身も、人としての権利というところで考えてかかわらなければいけないというのを改めて思いました。

子供自身の問題と言われる行動について、背景があるというところです。先日虐待のネットワークの勉強会でも、背景というところは、大きな理解が必要だと思いました。子供を育てる保護者の背景のことは、必ず認知すること、最初から虐待したくてしている保護者はいないはずだと思っています。背景とともに、一人一人が大切にされるために、お話にあった、余り目立たない子にもサポートしていくという部分もそうですし、多様性が増している今、学校以外にも子供たちの居場所や子供たちを支える人の存在が大きいと思います。まず保護者自身の心の安定が最重要課題だと思います。保護者の中には、抱え切れない悩みで子供を傷つけてしまうケースがあります。

今朝もニュースがありました。11歳のお子さんをお母様がかたいもので殴ってしまったというようなニュースです。保護者の心の安定が重要課題だと思います。子育てにやさしい街である松戸の中で、子供の年齢が上がっても温かく受け入れられるような、承認されるような場所が親、保護者、子供にも両方必要だと思いました。

今、メディアでかなり話題になっているテストとかがない新しい取り組みをしている麴町中学校のほうで、研修会に参加させていただいています。勉強会で承認と受容というところを学んでいきます。この場でも、学びをお話しできたらと思っています。

以上です。

教育長職務代理者 ありがとうございます。

内容を大分はしょっていただきました。いいですか。

山形委員 大丈夫です。

教育長職務代理者 きょうは議案自体が少なく、多少またこの後も皆さんからもご意見いただければと思います。

東葛飾地区教育委員会連絡協議会、総会・研修会参加報告というのが、私のほうからも出

ています。

まず、運営のことについていうと、松戸市教育委員会が今事務局となって行っているということで、滞りなく行われておりました。

研修会のほうなんですけれども、そのぼちでいうと4つ目になりますけれども、この方のお話については、語弊を恐れずに言うと、ちょっとやっぱり情報とすると、ちょっと時代が前のことが半分ぐらい下敷きになっておっしゃっているような感じがあって、それ裏返して言うと、非行が中心だったところから、今はもっとSNSに舞台を移したり、あとははじめの形とかも変わってきたり、不登校の実態とか、そういったことも含めて、いろいろと変化がある中でいうと、1つの経験だけじゃなく、もっともっと我々もアンテナを広げていかなくちゃいけないなということを先生の話聞きながら思いました。

その困難を抱える子供というのは、昔から、私たちが子供のころからもいたと思いますけれども、本質的には何なんだろうと思うと、孤立なのかなということをお話を通じて感じています。

この研修会のテーマが、大人たちの連携でありました。支援する大人たちがどう連携するかというテーマで、このお話をされたわけなんですけれども、お互いをシステムチックに動かそうと思う余り、緻密な制度をつくらうと思っても事態が変化していきますから、どのようなところに力点を置いて、今後我々が連携を深めるかというのも、キーワードは孤立させないということなのかなという、感覚的な私の感想です。別に仕組みが全然ないわけじゃないですよ、今も。児相の問題なんかも、盛んに言われていますけれども。そういった仕組みとか、あとは人が助け合う気持ちとか心とか、そういったものをつなぎ合わせるためのことをどうするかと。それを連携ということで、この先生から聞き取りをしたように思います。

それと、あと最後に書いたんですが、ちょっと口幅ったいんですが、やっぱり研修会のやり方ですね。少しやっぱり双方向とか意見交換とかが、ふえていいんじゃないかということを書いておられます。子供たちが対話によって問題解決をこれからしていく、そういう能力が求められる、コミュニケーションの能力等が求められる中で、私たち自身はやっているのかとかという、それは別に総会とか研修で必ずしも実現すべきことだけではないんですが、こういう研修会というからには、意見交換といったものがもっとふえていい。

文科省の研修で行ったときなんか、グループ討論みたいな形で、結論を求めるでなく、意見交換から気づきを得て、それぞれが持ち帰るということがあって、私も有益だったと思っ

ています。そんなに難しい仕組みじゃなくできるとすれば、今後この6市の一番近い隣近所で、かつ教員の方の異動とかもかなり重なるこのエリア、それぞれの町の顔も、行ったことはあるという意味でわかっているこのエリアで、それぞれの背景を理解しながら、お互いこの面として、東地区という面で何かよい取り組みがあるのであれば、それ共感すべき、別に、別の自治体ですから、同じことはしないにしろ、共感すべきじゃないかと。そこら辺のいい意見交換の場、私ちょっとその後の懇談会出られなかったんですけども、そういうところも通じて、理解し合うということが今後必要じゃないかなということをちょっと思いましたので、書いてあります。

それから、これ、お出になっている方もあといらっしゃいます。

どうでしょうか、武田委員。

武田委員 そうですね、上條先生のお話は、やはり想像していたとおりだなと思う部分と、やっぱり想像しているよりも現実が深刻なんだと思う部分と両方あったんですけども。ただ、やっぱり何か急にということじゃなくて、日々の中でどういう協調性がとれるのかというのを、本当に個人が意識するだけでも大分こういうものは変わってくるのかなというふうに、特別なお子さんのケースは別として、そうではない、割と突出している子の話が多かったんですけども、そうじゃない部分の、日常の中で少し困ったりとか、少し悩んでいたりと、そういう部分を丁寧に拾っていくことが、いろんなものの拡大を防ぐのかなというふうに逆に思って考えて聞いていました。

その後の懇談会のほうでは、やはり柏市さんの委員さんと少しお話をさせていただいたんですけども、松戸市も新設校をつくったりとか、そういったことは本当に大変なことですが、柏市あたりでも、流山市さんあたりでも、いろんな形で人口の増減みたいなものが起きて、各市すごく一生懸命頑張っているというお姿を拝聴することができて、この東葛地区というのは、全体的に人口がふえたり、あるいはいろんなことで影響を受けやすい地域なので、何かやはり、今山田委員もおっしゃったように、いろんな雑談の中から今後につながるような知識とか意見とか、そういったものが見出せたら、それが一番有意義なのかなというふうに私も感じました。

以上です。

教育長職務代理者 ありがとうございます。

伊藤委員もご出席なんで。どうぞ。

伊藤委員 1点だけ気がついた点としては、講師の方が警察におられたということもあるんで

しょうけれども、そういうご経験から、警察と学校サイドでいろんな事件や出来事に対する認識の温度差というのが、今、非常にあるのではないかと指摘をされていて、子供さんに対する家庭での虐待とか、そういったことがうかがわれるようなときには、学校サイドでは、ちゅうちょせずに警察に通報してくれというようなことを強調されていたのが、ちょっと非常に印象的でした。特に最近いろんな事件が表に出ていますので、そういったところを先生方がよく認識して、警察との連携というか、敷居をそんなに高くせずに、警察に相談できるようなことをやっぱりやっていくというのは、ある程度学校サイドもそういうのをちょっと受けとめていかなきゃいけないのかなという、実際にはなかなか難しい面もあるのかなとは思いますが、ちょっとそういうような感じを持ちました。

それから、あと山田委員がおっしゃった、研修でのグループ討議というのは、私も文科省で経験して、非常にいいと思うんですが、今のままでみんなが集まった状態だと、全員でやっても恐らく議論にはならないと思うので、誰かいわゆる学識経験者の話を聞くとか、O Bの方の話を聞くとかいうようなことで、知識を得るという場でのそういう講演とかが中心になるのかなとは思っているんですけども、それを切りかえて、もう少し小さなグループに分けて、何かそれぞれ地域、都市で、何人かうまく分けて、個別のテーマでそれぞれのことを議論をするというようなことも、有意義かなと思います。

以上です。

教育長職務代理者 ありがとうございます。

よろしいですか。

教育長、何かあればまた後でにしますか。ここで、また続きもありますから。どうしますか。

教育長 後で。

教育長職務代理者 後でにしましょうか。

市場委員、いいですか。特にご質問等あれば。

続いてで恐縮です。

今度は、千葉県市町村教育委員会連絡協議会というのが、5月21日にありました。これは、私と教育企画課の大西さんとで行って来ましたんで。大西さん、後で、じゃ、感想を。

これは、旧茂原市民会館の最後の行事とかと言っていました。もう取り壊すとか言っていましたけれども、古い建物ですね。嵐の中を行ってまいりました。

ちょっとかなり違和感を感じたというのが、最初のぼちでございます。

つまり何かというと、これからの時代が激動の時代、子供たちがかわいそうであると、気の毒であるという、それは単に言葉の問題であればいいんですけれども、少なくとも公式の場で、言葉の問題だからいいという、そういう感性かなと思ったのは、大変残念なんです。この日本では借金もたくさん残されて、AIで仕事も奪われて、これからの子供たちは本当に気の毒だということで、私たちは、だからぶれることなく力強い子供たちを育てるべきだという文脈は、まず私の聞き違いならいいんですけれども、こう受け取る人もいるようなことを発信するというのは、いかがなものかな。別に、言葉尻をとらまえてというつもりはないんですけれども、あえて言えば、その下4行のところ書いていますが、今の日本はすごく問題はある。子供たちを取り巻くことも、本当に毎日毎日ニュースで出るようなこともある。ありますけれども、これは例えば、じゃ、50年前、60年前の日本がもっとよかったのか、そのときの子供たちのほうが幸せだったということなのか、あるいは、今、途上国で学校にも通えない子供たち、たくさんいるということ、そこと比べて、だから満足するということではないけれども、捉え方とすれば、未来に向かう道筋は、今の日本の子供たちにはあるんだということはどう伝えていくかということは、腹に持つべきなんじゃないかということを感じました。

これ、逆に私が非常にそこに何か偏ったものを持っているのかもしれない。ここは、本当に感覚の問題ですけれども、リーダーとしての発信としていかがなものかなということを感じたので、あえて書かせていただきました。

県教育長は、これは置いておきまして、それから特別講演ということで、プログラミング教育についてということです。これ、いろんな資料で同じ共通のものを使っているんで出てきているんですけれども、Society 5.0というようなものの流れの中から、この2045年にシンギュラリティを迎えるという、AIの能力が、コンピューターが人間を超えるということが、別にそれを信じるかどうかというの、それだけを見て、人は信じるわけではないと思いますが、信じる信じないというよりも、やっぱり物の見方として、このシンギュラリティといったものに関して、軽視すべきではないけれども、これに踊らされないということが必要なんじゃないかと思いました。ちょっと資料の使い方の中に、あっさりとかういうことが書かれているので、どうなのかなといった点です。

それと、あとは、これ、人口統計で政府の人口統計研究所とか何とかそういったところで出していて、国交省がそれをまた引用しているものからさらに引用してありましたけれども、やはり人口が減るといって、2100年に4,771万人というのが注意推計と書いてあって、もっと

低い可能性もあるという、この私たちは生きていないにせよ、子供たちの時代に人口が半分になるかもしれない。これから国の施策にもよると思いますし、わかりませんが。人がこれだけ減るって、しかも高齢化率が高いという中で、どういう社会をするのか。これ、ロボットとかの可能性について当然ここから言及されていくわけですが。これは、やはり相当なインパクトがある数字だと思います。もちろん、この場にいらっしゃる方は、感覚的にもうその辺のところは踏まえてのことだと思うんですけども、どういう社会で生きていくのかといったことですね。これについては、やはり大きいなど。

それから、プログラミングという言葉が、何かコンピューター化とか、整備とかに一方で何か話が行っちゃっているような気がして、プログラミング的思考をやるのだ。特に小学校の過程ではそうするのだという新指導要領があるわけで。じゃ、プログラミング的思考というものを、私たち大人はどれくらい踏まえているのか。つまり、こういう結果を求めるためには、こういう手順、こういう手順、こういう手順で、こういう要素を置いていけば、こっちの要素に向かう。これ、仕事をやっているとそうしているはずなので、自然にしみついてわかっているようであって、子供たちにそういうことを教え、あるいは導く大人の中で、もっとこのプログラミング的思考をきちんと意識して、結果を出していくという過程を実践をしていかないとだめなんじゃないかなということを感じました。

それから、情報活用能力というのが、必ずひとくくりこういう問題で出てくるんですが、図書館に司書がいるように、もしかしたら、そういうところで教員の方が、教師がそれを情報活用ということに関して道案内をするというようなことが出てくるのかもしれないと思いました。

それから、国の政策で、プロジェクトプラス可動式プラス無線LANを2022年度までに予算つけて、財政措置つけてやるということと、松戸市の今の方向性との着地をどうするのかなというところですね。

これは、本当雑談のような話ですが、英語塾がこれだけはやるのであれば、子供たちのパソコンなりコンピュータースキルの塾というものが、もっと出てきたもおかしくないんじゃないかと。身につけさせたいスキルの1つに英語があるのであれば、もっとパソコンというのは、これから出てくるかなというようなことは、帰り道で大西さんとお話をしました。

何か大西さん、ありますか。どうぞ一言。

教育企画課長補佐 教育企画課補佐、大西です。よろしく申し上げます。

当日山田職務代理者には、大変な大雨の中ご参加いただきまして、ありがとうございます。

た。

こちらの講演会でも、この次にご報告がある関東甲信越静での文科省の話でも、教育の情報化ということが議題でした。その両方を聞かせていただきまして、文科省でも教育のICT化にすごく力を入れているなということは感じました。説明では財政面でも力を入れているということだったんですが、地方公共団体で実務に携わっている立場としては、やはり市町村に分散してしまうと、まだまだ足りないのかなという感じを受けております。

以上です。

教育長職務代理者 ありがとうございます。

というところまでです。

じゃ、続きまして、関東甲信越静の参加報告をさせていただきます。これは5月31日です。大変涼しい山梨県でございました。

これ、一番上は、年に一度の研修会のための外形的な組織であります。ただ、集まるということに非常に意味があるとも思います。参加率が決して高くないので、これ、ここに半日を費やして、それぞれ予算も使って集まるのであれば、例えば先ほどのICTを活用して、双方向で意見交換したり、あるいは事前学習をしたり、教育委員が事務の、行政の方でないフィールドで、どれだけ自分たちで意見交換できるかみたいな場であつたらもっといいのになと思いました。これ、先ほどの伊藤委員からあるように、ただ情報をしっかり受け取るという意味もありますので、今のその情報提供を聞きに行くということの意味ももちろんあるんですが、ちょっとこういう感覚を持ちました。

その後は、プログラム、情報化について、教育の情報化の動向についてという講演がありました。これ、文科省です。これについては、大体似たような話があつたんですが、最後の項目が、遠隔教育の可能性というところでもございましたので、ちょっと帰り道、教育長にもちらっと質問したりしたんですが、教室の規模とか交通の問題とかをもし超えてしまう教育が可能になったときに、恐らく予備校なんかじゃ、今、さんざんそういうのをやっているわけで、公教育の中でこれをしっかりとキャッチアップして行って、実現するというのをどれだけ実現できるのかということは、非常に興味があります。

そして、記念講演は金田一という名前のとおり、辞書の編さん者の長男、お子さんですかね、弟がクイズ番組によく出ていると言っていましたけれども、金田一先生です。「人生100年時代を見据えた教育の在り方」ということです。

ちょっと感想のところを書いてありますけれども、非常に現在の公教育といいますか、義

務教育を肯定的に捉えていらっしゃると思います。大学の先生、よくこういうおっしゃり方するような気がします。中高というか、我々のレベルでいくと、やっぱり問題をいつも見つめているので問題が多いように思いますけれども、国際比較からいっても、非常に頑張っているという評価。ただ、新しいチャレンジで、長野県立大学2年生が入ってきたところだと言っていましたけれども、全寮制で全員留学して、アクティブラーニングその他いろんな取り組みをやっていらっしゃると思いますので、小さいところからこそとんどん変わって行って、新たなところに行くような気がします。私たちのフィールドは、そう簡単にかじは切れませんので、やるのであれば、しっかり見きわめて、思いきったかじを切るということが必要なんだろうと。

それから、最後に100年時代というところにちょっと戻っての感想なんですけど、私今50歳ですけども、本当に勉強してきたことが底をついちゃって、本当に学び直したいという気がします。仕事の上でですね。それが絶対何かになると思っていますし。今、そういった意味では、それが新たなまちづくりや経済の活性化といったところの、次の担い手になっていくようなことも、もう巷間言われておりますので、そこら辺について、教育委員会がどういう役割を果たせるのか、民間の力を引き出せるのかといったことについて、感想を持ちました。

以上でございます。

さて、これも行かれた、山形委員、ありますか。

山形委員 手元にペーパーを自分でまとめたものだけ持っていましたが、今、山田委員がおっしゃった遠隔会議については、教育委員会の1年目に大きな金沢に行ったときに、これを参加できない方はオンライン、遠隔とかでできないのかなって、思っていました。

仕事で実際に遠隔会議を昨日2件しています。便利で、助かることが多いです。こういう部分を、教育に入っているんだったら、この行政自体もそういうものを活用できたり、事情があり学べないいろんな方がいらっしゃるんで、学べなかった部分を、キャッチアップできたらと考えます。お話にあったその予備校の話もありましたけれども、実際にN高校とかN中学というのは、動画を見て勉強して、その後自分でレポートを書いて、そうして送信するというようなシステムをとっています。ただ、そのソフトの部分でいうと、人に定期的に会うというようなカリキュラムも設けていますので、これからの時代、学び方が広がってくることと、遠隔教育を見たときに、ご病気のあるお子さんに向けてと言っていましたけど、不登校のお子さんに、ぜひこういう学び方もあるよと届けられたら、負担感が減るんじゃない

かなと思いました。不登校のお子さんの中で、どうしていいかわからない。今、いろんな理由があるんですが、その時間を潰すように漫画を読んだり、インターネットやゲームで昼夜逆転になってといく中で、どの自分が本当はしたいこととしたくないことがぐちゃぐちゃになってきて、でも、親からたくさん叱られて、どんどん自己肯定感がそげていく中で、選択肢が日本はすごく少ないです。その部分で、遠隔教育、こういう学びの時間が、選択できるご家庭であれば、メディアがあるかどうかによっても違うんですけども、これからそういうところでも、遠隔教育が有効活用されて、自己肯定感がそげないような教育環境になっていけばいいのになと思いました。

金田一先生もお話の中でも、7つの項目の中で、私が大きく共感したところは、やっぱり自己肯定感が日本人は低いというところです。自己肯定感からプラス思考というお話をされていましたが、今、高校3年生の60%ぐらい、2015年のデータでしたけれども、自分は役に立たないというような自分を卑下するような結果のアンケートが出ていました。

自己肯定感が低いと、本当にやろうと思う一方の力がとてもそげてしまうので、この部分は必要だなと思いました。自己肯定感を持つためのつながりという部分と、あとはお話の中で、大事なのは笑いというのも大事なと思います。最後のほうに、笑いについてお話をされてました。とても共感しました。そして、山田委員もおっしゃっていたように、どんどん学び続けないと、子育て環境についても、とても変わっているので、常に学び続けていきたいなと思い、今回の研修の学んだことも、今後に生かしていけたらと思います。

教育長職務代理者 ありがとうございます。

武田委員。

武田委員 小淵沢の施設はとてもきれいなところでした。なかなかここ、このあたりに住んでいると、ああいう美しい新緑を浴びるように感じるという機会は、本当はないわけで、小雨が降っていて、本当に何でしょう、空気がこんなにきれいなのかというのは、久々に気持ちよく感じました。ICT化の話をしている中で、今、会議の簡略化とか距離的な問題等、すごくよくわかるんですけども、やっぱり実体験は素晴らしいというのが、まず最初に言いたいこと。

補足としてとか、時間的制約がある中で活用してくというのは、非常に有意義なことだと思う反面、そちらに「だからいいじゃないか」になっていくことに対する危惧は、私はすごく大きいです。遠隔地といっても、本当に島で、数人しか子供がいないようなところで、多くの人数と交じり合ったほうが子供の可能性が広がるとか、そういう絶対的な要求としてあ

ったほうが良いという場合においては、非常に有効的だと思う。あと、ICT化で私が個人的に素晴らしいなと思ったのは、個別学習に役立てるということで、やはり学習欲求って、何ていうか、一画性でやってしまうと、伸びるべき子が伸びにくくなる環境というのは、否応無く在るので、大いに上を目指す子のために、個別学習というのはどんどん進んでいくといいなというふうに感じました。

ICT化は、やはりむしろ学校の先生方の業務の効率化というところに、より大人がもう実体験をわかった上で、それを活用していくことは、何ら問題はなくて、ぜひどんどん簡略化できることはしていったらいいなというふうに思いました。

記念講演、金田一真澄先生、すごく穏やかな感じの方で、気持ちのいい方だなというふうには、まず話し始めた瞬間から感じました。内容としては、本当に人柄の穏やかなお話ぶりという感じでした。私がすごく感じたのは、やはり金田一家で育った方だからなのかわかりませんが、読書という、読書力、読解力、プレゼン力、そういったすごく基礎的な文章力についてのお話が多かったように思います。AIでも不得手としている文章読解力を身につけてほしいとか、プレゼン力で鍛えて、人前で表現する自己肯定感につながる行為を重ねてほしいとか、あと、人生100年時代には読書というものは強力な生涯学習のアイテムであるとか、そういった言葉がすごく心に残りました。

最後に「最善を尽くして一流たるべし」というポール・ラッシュ牧師の言葉、私失礼ながら、この方を存じ上げませんが、その方の言葉を引用していらして、教員の方に対するメッセージとしておっしゃったのかなというふうに聞いていました。教育に対して哲学と情熱を持てること、子供を好きだと言えることというのを大切にしてほしいというふうにおっしゃっていました。すごくわかりやすく、何ら新しくないんですが、改めて言われると、非常に重たくて、ぜひこういうすごくストレートな言葉を各教員が感じてくださると、本当ベーシックなところでいい環境が生まれてくるのかなというふうに感じました。

以上です。

教育長職務代理者 伊藤委員。

伊藤委員 私もこの関東甲信越静の会合では、金田一長野県立大学学長の講演については、やっぱりいろいろ興味深い点が多かったので、山田委員の感想と若干重複しますけれども、少し話をさせていただきます。

小中学校の先生が非常に真面目で、特に何でも引き受けようとするというような言い方をされておられました。例えば英語教育をやるといえば、じゃ、英語教育をその先生が勉強し

てやるとか、あるいは、ICTも自分にはわからなくてもそれを勉強してやろうということで、そういう小中学校の先生が何でも引き受けてやるという、そういう真面目な姿勢は非常に尊敬に値するというので、あと、生徒に対する話し方でも、話し方が非常にうまくて、子供たちの心を捉えるような、そういう教育をしているので、自分のような大学で教えている先生というのは全くそれとは逆で、聞きたくなきゃ聞かなくていいやというような感じで話をするんで、そういうところは、本当に尊敬に値するというので、それが国際的に比べても、日本の小中学生の学力が高いというのは、やっぱりそういう先生たちのおかげだということで、かなり持ち上げていただけたのかなという感じはしますけれども。

その点については、私もこの教育委員になって、先生たちと接するようになって、全く同じような感じを持って尊敬しているんですけども、他方、先生たちがますます過重労働になっているので、今は文科省を中心に進めようとしている働き方改革を本当に実のあるものにしていかないと、ますます先生になりたいという人たちが減っていくという流れは変えられないので、そこをちょっとやっぱり真剣に取り組んでやっていかないと、金田一学長がおっしゃられたようなそういう先生の姿というものも、いつまでもそういう形であるというふうに思っていることができなくなるんじゃないかなというところ、ちょっと心配に思いました。

それから、長野県立大学は、非常にユニークな制度を打ち出している大学だなという印象を受けました。特に、全員が2年生の2学期、3学期あたりに海外研修で、数カ国を選んでやっているらしいんですけども、そういう全員参加の海外研修をそれをやるという、そういう大学ということで特色を出しているということでした。

確かにこれからのグローバルな社会の中で、活躍できる若手を育てていくためには、やっぱり海外研修というのは本当にやっていくべきだと思いますので、大学であればもちろんいいんですけども、できれば松戸においては、高校のレベルで、そういう海外留学をもっといろんな機会でするようにいろいろ働きかけていくことが必要かなというふうに感じました。

それから、日本人は自己肯定感が低いという話については、これはある一面、日本人の一種の特性というか、日本人というのはいつも謙遜したり、自分のことを卑下したり、それが日本人の美德だというふうに育ってきているので、なかなかそれをかなぐり捨てて、私が私というか、そういう姿でやっていくというのは、よほど意識しないとなかなかできず、そういう自己肯定感が低いというのは、ある一面しようがないとは思いますが。

ただ、それをやっぱり変えていかなきゃいけないというのはその通りだと思いますので、いろんな場で積極的に議論をするというか、プレゼンテーションを自分で臆せずに、そんなに自信がなくてもとにかく話し出して、議論のきっかけをつくる、あるいは議論に乗るといような、そういう習慣を小学校、中学校のレベルからつけていくということは、これからの教育にとって非常に大事だと思うので、そういう意味からも、今取り組んでいるアクティブラーニングというのをそういう形で実際にクラスの中でやっていただいただけると非常にいいのかなというふうに感じました。

その関連で、プレゼンテーションの型って彼は言っていましたけれども、まず最初に結論を言って、次にその理由を言って、それから最後に幾つかの具体例を挙げるとい、これは、1つの典型的な型だと思うんですけども、私自身は、プレゼンテーションというのは、必ずしもそういう1つの型にはめなくても、いろんなケース・バイ・ケースで、なるべくみんなの関心を引っ張って行って、最後に結論を言うこともできると思いますが、ただ、なかなか慣れないとそういうのはできないので、どうやってプレゼンしようかなんていう心配しないでやれるようになるという意味で、まず、そういう型を覚えて、どんどん積極的にやっていくということは、大事だなというふうに感じましたので、そういうことが教育現場でどんどん取り入れられていけばいいなというふうに思いました。

それから、あと大学で学んだ最新の知識も10年たつと古びてしまうけれども、その後読書を通じて学び続けることができるというようなこともおっしゃっていて、既にお話が出ましたが、やっぱり読書の重要性というか、そういったものが、これはもう繰り返しいろんなところで言われ続けなければいけないのかなというふうに思います。

ただ、小学生が例えばどんどん本を読むとすると、中学生はそこから減っていくし、高校生になればもっと減って行って、大学生になるともうほとんど本を読まないという1つの流れがあるので、これは恐らく関心がどんどんいへるところに向いていくので、小学生と同じぐらいの本を読みなさいといっても、大学生は読むわけではないと思うんですけども。1つ心配なのは、今たくさん読んでいると思われる小学生ですら、あるいは中学生もそうなんですけれども、何か大体小学生の高学年ぐらいになると、皆さんスマホを与えられるじゃないですか。そうすると、もうスマホっていうのは非常に魅力的で、動画がいつでも見られるし、おもしろいんですよね。ですから、どうしてもスマホを見る時間が増えると、勉強時間を減らすわけにはいかなければ何を減らすかといえば、読書の時間を減らす、睡眠時間を減らすということもあるかもしれませんけれども、そういう傾向がどんどん顕著になっていく

と、小学生の読書量も、近い将来には、どんどん減っていくんじゃないかと心配で、そういうふうにならないように何か手を打たないといけないのかなと感じました。

以上です。

教育長職務代理者 ありがとうございます。

一応一通り参加報告ということでございます。

教育長、何かコメントいただければ。

教育長 はい、もういっぱいあるんですけども、いっぱいと言えないので、東葛の、その前のそれぞれの研修会に参加していただいてありがとうございます。5月は毎年のことですけども、あっち行ったりこっち行ったり本当に大変なんですけど、感謝します。

その中で、まず東葛の、特にあの研修の内容ですけども、「古いな」って正直に思いました。もう個の問題ではないでしょうという、かえって孤独の孤のほうを何とかしなきゃいけない。もっとみんなで子育てというか、みんながつながって、一人一人をマイナスの部分を何とかゼロにしたりプラスにしたりしなきゃいけない状況になっているのに、ああやって何か問題があった場合の個の原因をというふうな話に終始してしまったことは、すごくえーって思いながら、あの時間は過ごしていました。

やむを得ないのかなというふうに、警察の現場にいるとしようがないのかなとは思いますが、でも、だから繰り返すのかなというふうに、最近のいろんな事件を見ていても、見てるといふか聞いても、そういうふうに思います。もっともっと私たちがつながって、1つの家庭の問題ではなくて、やっぱり地域の問題であったり、コミュニケーションの問題であったりするわけですから、そういう視点を私たちはやっぱり発信できる場所なので、これからも発信していきたいなというふうに思いました。

それから茂原と、それから山梨の6都市、両方とも国からの内容は情報教育だったんですけども、茂原のほうは情報の担当室長補佐の方で、北杜市のほうはその課の課長補佐、やっぱりちょっとレベルが違ったんだなと報告を伺っていてそう思います。

たしか北杜市の佐藤課長補佐の方は、あの方はあちこちに出られているんですけども、もうプログラミング教育というよりは論理的思考の問題なんですって途中でずばり言っていましたよね。パソコンをどう扱うかという、そういう問題ではなくて、むしろキーボードを打つのは今の子どもたち上手じゃないですから。10年ぐらい前の子どもたちのほうが、キーボードは多分上手だったのかなというふうに思います。もうキーボード使わなくなっているのだから、別に、かといってじゃ、科学は進まないのかというと、そういう問題じゃないですよ。や

っぱりプラスとマイナスをどう組み合わせ、サインを送って、プログラムをつくるかって、そのもとになるのはやっぱり論理的な思考力ですから、そこをいろんな場面で育てていくというのは、私はプログラミング教育の基本だと思うんです。パソコンの前に向かわなきゃいけないということじゃないですって、佐藤課長補佐さんもたしかおっしゃっていたと思います。その辺は取り違えると、何かあの中でサイネットとか、とんでもない高級な環境をつくらないといけないみたいな気さえするような動きもあるので、十分私たちのほうも、その辺は意識して取り組みたいと思います。

その中で、遠隔教育が何回も話題に出ていたんですが。この間もどこで言っていたのか忘れてしまいましたが、例えばお話の中にあつたように、不登校の子供とか、いろんな環境、個の環境の中で、遠隔教育を活用することも、これも可能ですけども、私たちが想定しているのは、例えば松戸市の45校の小学校も、規模で大分差がついてきています。決して国の基準からしてみると小規模でもないんですけども、でも、ほかからしてみると、規模の小さい学校で、もっとほかの子供たちと、例えばいろんな議論をしたいとか、コミュニケーションとりたいというときに、具体名上げると、新松戸西小とか高木小とか、あるいは六実二小とか、そういった小さい学校同士がそういうリンクを張れば、例えば3校同時である課題についてみんなで意見交換するとか、そういうことが可能なわけですよ。小さい学校なりのメリットを、そうすればつくることもできるのかななんて、そういう遠隔教育の活用の仕方もあるので、それを松戸でも検討するに値する課題かなというふうに思って聞いていました。

最後の北杜市の金田一先生の話は、やっぱり私もすごく楽しかったですね。一番聞いてうれしかったのは、いろんな出てくる事例が、そうだよこの人だよとか、ああ、そうだこの方がおもしろいんですよとか、読んでいる本がいっぱい出てきたりとか、新井さんもそうだし長谷川さんもそうだし、でも、新井さんは前も伊藤誠委員さんからAI対読解力のあの事例がありますけれども、あの本を読みながら、私もすごい違和感があつたんですよ。そうしたら金田一先生も取り上げられて、これは読解力というより論理的な思考力ですよっておっしゃっていました。私も、だから何でこれが読解力なのかなと思ひながら、途中から何かそういううがった読み方を私はしてました。

一番「わっ」と思ったのは、今、伊藤委員さんがおっしゃった言語技術の部分、要するに結論を先に言つてという、あれは実はランゲージアーツという、いろんな外国でやっている言葉をどういうふうに扱って、相手にどう伝えるか、あるいは相手の言うことを飲み込んで、

どうやって表現するかという、あるいは書くこともそうですし、いろんな分野で言葉を、要するに言葉の技術を勉強するという、そういう分野が英語にもあるし、ドイツ語にもあるし、フランス語にもあるんですよね。そういうふうなものの一部を取り上げて、日本語分野に今松戸市はしているわけで、あれを取り上げてくれて、しかもその取り上げ方が、やっぱりこれからの子供たちにはこういうことをきちんと学んでほしいというふうにおっしゃっていたので、「ああ、間違っではないいな」というふうにあの時点で思えて、すごくこれは励みにもなりました。

その後で、最後のほうで、長谷川眞理子さんの、文化人類学者さんなんですけれども、アフリカから人類がなぜ世界に行ったのかなという話をしていましたよね。好奇心じゃないのって話を金田一先生がしていたんですけれども、私もそう思うんです。AIがどんどんこれから進化してして行って、ITの世の中になったときに、やっぱり私たちが、私たちというか、人がつくっているこの文化、社会は、やっぱり基本になるのは好奇心なのかなと思うんですよね。好奇心というか、自分をいかに高めていくか。機械がどうのこうのじゃなくて。そういう力を子供たちにやっぱり育てていく責任が、学校教育には多分あるんだろうなという気が今しています。すごくあの先生の1時間の話は、90分か、すごくよかったというふうには、今でも思っております。

何か長野県立大学は、入学してみたいですよ。というところです。

教育長職務代理者 ありがとうございます。

以上、研修参加報告。

あと、あれですね、学校訪問については、ちょっと改めて、恐らく春から夏にかけてのシーズンが、今もう皆さん行かれている途中だと思いますので、また改めて来月以降やりましょう。

そのほかよろしいですか。

それでは、以上でございますので、議事進行を教育長にお戻しいたします。

教育長 では、次回の教育委員会会議の日程について、事務局からお願いします。

教育企画課長 次回、7月定例会でございますが、令和元年7月11日の木曜日午後2時より、こちら5階会議室で開催されてはいかがでしょうか。

教育長 よろしいでしょうか。

(「はい」の声あり)

教育長 それでは、確認いたします。

令和元年7月定例教育委員会会議は、令和元年7月11日の木曜日午後2時より、教育委員会5階会議室にて開催いたします。

◎閉 会

教育長 以上をもちまして、令和元年6月定例教育委員会会議を閉会いたします。

ありがとうございました。

閉会 午後 2時40分

この会議録の記載が真正であることを認め署名する。

松戸市教育委員会教育長

松戸市教育委員会委員